

最新情報満載!

ドクター竹田の

# 周産期トピックス

日進月歩の周産期医療。こまめにチェックしようと思っても、とてもひとりでは追いきれません。そこで、医療関係者なら知っておくべきトピックスから、まだ誰も知らない最新のニュースまで、順天堂大学産婦人科の竹田先生が解説します! 大学でも学生の間で「竹田先生の講義はおもしろい!」と大評判。「ふむふむ」と納得できる内容満載ですので、一緒に日頃の疑問を解消しましょう!



竹田 省 (たけだ さとる)  
順天堂大学医学部 産婦人科学講座 教授

1952年生まれ。1976年 順天堂大学医学部卒業、順天堂大学医学部麻酔学教室、1978年 東京大学医学部産科婦人科学教室、1985年 埼玉医科大学総合医療センター産婦人科講師、1992年 ロンドン大学(現インペリアル大学) 王立大学院産婦人科留学、1999年 埼玉医科大学総合医療センター 総合周産期母子医療センター 教授、2001年 埼玉医科大学総合医療センター産婦人科 教授を経て、2007年より現職。専門領域は産科救急医学、周産期医学、婦人科腫瘍学。

プロフィール



## 第1回 お産は

## 安全?

TOPIC 1

### はじめに ——— 「今、周産期が面白い!」

**30** 万年に及ぶ人類の歴史のなかで、いちばん急激な変化を遂げているのはこの50~100年間といえるでしょう。

まずは平均寿命。医療の発達や生活環境の変化を背景に、日本のみならず世界各国で急激に平均寿命が伸びました。日本を例にすれば、戦後60年で平均寿命は1.6倍の長さになりました。

そして、平均寿命が伸びたことで、産婦人科、周産期分野では、女性の閉経が注目されるようにもなりました。つい70年前の女性の平均寿命は50歳未満……。ほとんどの女性は閉経を迎えずに亡くなっていました。しかし、ご存じのとおり、現在では多くの女性が閉経を経験します。これは大きな変化です。また、ライフスタイルの変化に

合わせて、平均初産年齢が年々高くなっています。さらに、昔はお産というと死亡する確率が高かったのが、技術の進歩により戦後60年で日本の妊産婦総死亡数は1/70に減りました。

近年、医療は急速に進歩していますが、特に周産期関連の分野の進歩は目をみはるものがあり、周産期関連の学会では毎年毎年驚くようなニュースが発表されています。不妊治療の進歩、性転換手術の普及、遺伝子と性格の関係などなど。なかには今までの概念を覆す報告もあるため、教科書を改訂しても改訂しても追いつかないくらいです。

急激に進歩し続ける周産期分野、注目のトピックスを少しずつ紹介していきます。

### お産は命を落とす疾患? TOPIC 2

**第1** 回目の今回は、これまでの日本における産科の歩みを振り返りながら、お産についても一度考えてみましょう。

突然ですが、現在、世界で最も命を落とす病気は何かご存じでしょうか。そう、AIDSです。そして、AIDSの次に、妊娠・分娩が挙げられます。ユニセフによれば、世界では年間50万人以上の妊産婦が妊娠・分娩で命を落としており、その99%が開発途上国に暮らす妊産婦です。衛生管理や健康管理、輸血など医療介入によって、妊産婦死亡率は改善できるため、何とも歯がゆい現実です。

開発途上国の妊産婦死亡率の平均は、出生10万あたり950で、出産時に約100人に1人の産婦が亡くなっていることとなります。先進国

の平均は、出生10万あたり12.5であり、約8000人に1人、とくに日本は出生10万あたり3.1と先進国のなかでもトップクラスの少なさです。また、日本は妊産婦死亡率だけに限らず、新生児罹患率や新生児死亡率、乳児や幼児の罹患率・死亡率も世界で最も低い国の1つで、出産・育児を最も安全にできる国といえます。

もちろん、日本の妊産婦を取り巻く環境も、はじめからこんなに安全だったわけではありません。その背景には産科医、小児科医、助産師、看護師などの医療従事者、公衆衛生関係者、行政関係者、教育関係者のたゆまぬ努力がありました。戦後60年の間に妊産婦死亡率が激減した日本の歩みをたどってみましょう。